

千葉県公立入試「英語リスニング」分析報告 ― 情報処理型テストへの変化

新・個別指導アシスト習志野校 櫛山亮人

2012～2025 年度の千葉県公立高校入試「英語リスニング」を、問題形式・音声原稿・設問構造の観点から継続的に確認してきました。そのなかで、指導の際に押さえておきたいポイントを共有します。

1. 「聞き取りテスト」から「情報処理テスト」へ

大まかな流れは以下の通りです。

2012～2013：短い対話と単発の内容一致問題が中心。聞こえた情報をそのまま対応させれば正解できる問題が多い。

2014～2016：応答選択に加えて、図・簡易地図・理由を問う設問が増加。とはいえ、一問あたりの処理はまだ素直で、「一問一情報」で完結する問題が多い。

2017～2020：絵・地図・時刻・買い物など、複数条件を整理して選択させる場面がはっきり増える。会話・案内文の情報量もやや増加し、「どこが根拠か」を意識させる構造が目立つ。

2021 年以降（一本化後）の「新傾向」

毎年ほぼ共通して、次の 4 タイプで構成されています。

1. 短い対話の応答・内容把握
2. 絵・地図・表と連動した問題
3. やや長い会話の要点・選択
4. スピーチ・案内文・意見文＋内容理解・簡単な補充

特に近年は、スクリプト中の理由説明や、複数人の発言内容を整理したうえで解答させる設問が増え、「聞き取り＋情報整理」を評価していることが読み取りやすい状態になっています。

ここから言えるのは、「音声で出てきた英語を拾えるか」だけではなく、

- ・複数の情報を選別・保持し、
- ・表や図・メモと対応させて判断する力

を安定的に問う方向へとシフトしている、ということです。

2. 現場で優先したい指導ポイント

この構成を前提に、指導側として意識しておきたいのは次の 4 点です。

（1）形式に即したトレーニングの比重を上げる

短文応答／地図・表／会話文／案内文・スピーチという 4 類型を分けて練習させることで、「どのパターンで何を聞くか」を生徒側が予測しやすくなるようにしておく。

（2）「音の根拠」を言語化・明示させる

解説時には必ずスクリプトに戻り、「この一文（この箇所）が答えの根拠」であることを示す。聞きっぱなし・解きっぱなしで終わらせない。

(3)「2回放送」の役割分担を徹底指導する

- ・1回目：設問・選択肢を踏まえて、大まかな候補を絞る
- ・2回目：必要な数字・条件・理由だけを確認する

このルーティンを明文化して教えておくことで、本番時の不安定要因を減らせる。

(4) 難易度別に年度を選別して使う

全年度を一律にやらせるのではなく、「どの層にどこまで使うか」をあらかじめ決める。

基礎層：問題が素直な年度を用いて、「形式に慣れる」「定番表現を耳で取る」ことを優先。

中位～上位：2017年以降の、条件整理が必要な年度を軸に演習。

上位～最上位：一本化後の最新年度で、「長めの話＋複数設問」に対する処理を仕上げる。

3. 「聞き流し」で済ませないために

千葉県英語リスニングは、

- ・教科書レベルの語彙と文法を中心に
- ・日常・学校生活・行事など現実的な場面で
- ・安定した形式で出題されている

という意味で、本来は「対策しやすい」領域です。

にもかかわらず得点差がつくのは、

- ・形式と出題意図を踏まえたトレーニングになっているか
- ・それとも「音声教材を配布して満足」になっているか
- ・そもそもリスニング対策を生徒任せにしていないか

といった違いが、現場レベルで顕在化しているためだと感じます。

各塾それぞれのやり方があると思いますが、「千葉のリスニングは、こういう力を見にきている」という視点を共有できれば幸いです。

4. 当教室での年度選定モデル（参考）

以下は、当教室での一例です。各塾の教材構成や方針に合わせて調整してください。

基礎層：2012→2013→2014 後期→2015 前期

⇒素直な設問が中心で、「形式に慣れる」「成功体験を作る」段階に利用。

標準層：基礎層＋2015 後期→2016 前期・後期→2018 前期・後期→2021→2025

⇒標準的な情報整理問題を経由し、一本化後の基本パターンに触れさせる。

上位層：標準層＋2017 後期→2019 前期→2020 前期→2022

⇒複数条件処理、やや長めの音声が必要な年度を用いて、処理力を強化。

最上位層：上位層＋2023→2024（＋タイプ別縦解き）

⇒一本化後の高難度を中心に、どのタイプでも取り切る段階の仕上げとして活用。